

こんにちは、ノクチルです。

今日はタルコフからお送りします。

※本書は Escape from Tarkov とアイドルマスターシャイニーカラーズのクロスオーバー二次創作小説です。キャラクター、設定、世界観などを参考にしていますが、実際のゲームとは異なる部分があります。

※本書は実在の人物、団体、国家とは関係を持ちません。またいかなる特定の人物、集団を中傷する意図もありません。

※本書は 2022 年 1 月以前に構想されました。

## Friends from the East

「ふふっ、やば」

最悪だ。割れた窓ガラス。透の手には銃口から煙を立てる拳銃。その足元には、血を流して倒れている知らない男。

「実弾じゃん、これ」

耳が痛い。間近で聞く銃声というものが、こうにも鼓膜に響くとは。普段私たちがスクリーンやテレビ越しに聞くそれは、あくまでも娯楽として調整され、提供されたものなのだと思います。

はぁ、と私は見知らぬ天井を仰ぐ。どうしてこうなったのか。

「……海外ロケ？」

「ああ」

ユニット一同を前に、プロデューサーが切り出したのは連休が終わった5月のことだった。

「……場所はどこですか」

「ロシアだよ」

一枚のパンフレットがコーヒーテーブルの上に差し出される。

「ロシアと言っても日本からは反対側……ヨーロッパの方らしい」

「……ノル……?」

「ノルヴィンスクって読むの、これ」

並んでパンフレットを眺めていた透が、横合いから手を伸ばす。

「へー。いいじゃん」

「やは、きれい〜!」

ページをめくると、一面の青空とひまわり畑が見開きで広がっていた。

「9月に出る新曲のPV、ここで撮影しようと思うんだ」

私は聞こえないように心の中でため息をつく。地平線まで広がる花畑、その中にたえずむ古びた戦車。確かに日本では撮れない映像だが、安直といえれば安直。この人の考えそうなことだ。

「期間は？」

「夏休みに入っすぐ、一週間ほど……かな。仕事の方のスケジュールは押さえてあるから、あとは学校とおうちの方で調整してもらって問題なければ、それで行こうと思う」

「……用意周到なことですね」

「いいね」

広げたままのパンフレットをテーブルの上に戻すと、透はソファに背中を預けた。

「行こうよ。みんなで。海外」

「やは〜！ 楽しみ〜！」

既に透と雛菜は乗り気である。傍らの小糸に目をやると、小糸は目を輝かせてパンフレットと私の方を交互に見つめていた。

「た、楽しみだね……！ みんなで海外……！」

「……仕事でしょ」

既に浮足立っている一同を尻目に、私は再びため息をつく。

「まあ一応仕事ではあるが……観光の時間も多少は取ってある。みんなもノクチルとして頑張ってきて

くれたし、こころで少し羽を伸ばしてくれ」

「……豪気な話ですね。この事務所にそんな余裕あるんですか？」

メンバー四人に加えてプロデューサー。一週間の海外ロケ。それなりの費用は掛かるはずだ。最近ではTVに出る機会も増えたとはいえ、まだまだ駆け出しアイドルのPV撮影には景気が良すぎる話だ。

「……もともと、向こうの観光局から話があったんだ」

私の疑念を察したかのように、プロデューサーが話を継ぐ。

「海外からの観光客を増やしたいらしくて、企業も協賛して撮影コミッションをやっているらしい。滞在費用に関しては向こうからも補助が出る」

「……裏があるわけですね」

すん、と鼻を鳴らして、私はパンフレットの裏を返す。ノルヴィンスク州観光・ツーリスト局……英語だったが、そのくらいは読める。その隣に書かれていた企業名に、何か引くかかるものを感じた。

「テラグループ？」

私でも名前を聞いたことがある。ヨーロッパかアメリカか忘れたが、海外にある大手製薬企業だ。ドラッグストアに行けば、名前の入った頭痛薬を見かけることがある。

「あー……なんか、事故あったんだっけ？ 前」

あてどなく窓の方を眺めていた透がつぶやく。

「ほら、半年くらい前……ロシアの何とかがつてところで、何とかがつていう会社の工場で事故が起きたって」

「そういうことですか」

パンフレットには、風光明媚なりゾートホテルや自然豊かな森林保護区の写真ばかりが載っていた。工場を連想させるものは何もない。事故で減った観光客を呼び戻そうというキャンペーンの一貫なのだろう。

「危険はないんですか？」

「……一部にまだ立ち入り禁止地域があるらしいが、今回向かう場所からは離れている。危険はないと現地のコーディネイターからも確約を得ているよ」

「そうですか」

……その声色に、プロデューサー自身微かに疑念を抱いているかのような、そんな印象を受けた。その直観に従っていれば、と後になってから私は考えることになる。

「まだ、外明るいね……！」

「緯度が高いからでしょ」

ベッドの横の時計は、午後八時を過ぎていた。しかし窓の外はまだ明るい。日本よりもずっと緯度が高いこの辺りの夏は、なかなか日が沈まないのだろう。

夏休みが始まった最初の週。私たちはプロデューサーと一緒に日本を発った。

羽田から首都モスクワ、またロシアの国内線を利用して一日ぐらい立っている。時差と明るい空のせいで私は時間感覚が完全に狂っていたが、小糸は楽しそうにベッドの上から窓の外を眺めていた。空港の近くにあるこの簡素なホテルの周りは森ばかりだったが、

遠く河の向こうに旅の目的地……タルコフの街並みが見える。近代的なビル。河岸の工業地帯。こうして遠くから眺めていても、スケール感が日本とはやはり違う気がした。

「あれ、何だろう?」

「え?」

小糸の後ろから窓を眺める。森の中に切り開かれた道路を、暗緑色に塗られた装甲車が黒い煙を吐き出しながら駆け抜けていく。

「軍隊……かな?」

「……なんか、戦車とか乗せてくれるって言ってたし。その関係じゃない?」

「そ、そっか……!」

PV撮影のプランには、現地の軍隊に協力してもらったの撮影も含まれていた。アイドルと戦車。そういう絵が好きな人もいるのだろう。あるいは単に誰かの趣味かもしれないが。

「樋口ー」

ノックをするだけして返事も待たずに、透がドアを開けた。その後ろから雛菜も頭をのぞかせる。

「ご飯。行こ」

「雛菜お腹すいた〜!」

プロデューサーは、と聞こうとした瞬間、タイミングよくスマートフォンが鳴った。私物の携帯は日本に置いてきている。今回のロケのために渡された、海外仕様のレンタル端末だが、グループチェインは登録されている。

「コーディネイターと話をしてくる、先に食事を済ませてくれ……だって」

「あ〜〜! ケーキ! 美味しそう〜」

「ひ、雛菜ちゃん……甘いものだけじゃダメだよ…

…!」

「え〜〜!」

料理はカウンターから選んで取る、ビュッフェ形式のようだった。真っ先に冷蔵ケースのデザートに向かう雛菜を尻目に、私はトレイを手取る。

「えーと、これ。あー。あとこれも」

「ちよっと」

「え?」

「……わかるの？」

「あー……わかんない」

透はいつもの笑顔で肩をすくめるが、カウンターにいた店員はなにかロシア語で返すと、透のトレイに料理を載せた。何という名前の料理かは分からないが、湯気が立っていい匂いがした。

「これと……これ。お願いします」

つられたわけでもないが、私も開き直って日本語で料理を指さす。赤いスープのようなものと、おそらくハンバーグ……に見える。店員は無言でうなずき、私のトレイに料理を載せた。

「……食べきれの、それ」

「食べられるよ〜？」

テーブルに付くと、雑菜のトレイには色鮮やかで大ぶりのケーキが山のように盛られていた。ひと切れが、日本のケーキの五割増くらいはあるだろう。「ほ、ほら……！ 野菜とかお肉とか食べないと……

…私のサラダ、あげるから！」

「え〜」

「ふふっ」

小糸がキュウリとカニカマのサラダを雑菜の皿に分けようとしている。透は向かいでその様子を眺めながら、静かに笑う。

「せっかく海外来たのに、いつもと変わらないね」

「そう？」

「こうやってみんなでご飯食べて」

私はスープを一口スプーンですくう。トマト味かと思ったが、何かもつと違う、酸っぱいようなしょっぱいような味がした。時差ぼけと疲労で空腹だったせいもあっただろうが、胃に染みる暖かい味だった。

「私たちだけみたいだし」

レストランには私たちのほかに客はいなかった。夏の観光シーズンだと思うのだが、時間が遅かったせいなのだろうか。そういえば、ホテルに入ってから他の客の姿は見ていない。

「……なんか変な感じ」

「そうかも」

料理はおいしかった。

「……プロデューサー？」

「円香。みんな」

レストランから部屋に戻る途中。ロビーにプロデューサーがいた。

「……先に部屋に戻っていてくれ。出来れば四人一緒に」

自分自身を落ち着かせようとしているような、そんな口調だった。それだけ手短に言うと、プロデューサーは正面に立っていた現地コーディネイターの方に視線を戻す。テラグループのロゴが入ったIDカードをつけたその人の両脇には、自動小銃を持ってマスクで顔を隠した男（だと思ふ）が控えていた。

流石にただならぬ雰囲気だと、私にも理解できた。

「ね、ねえ……さっきの人たち……」

「なんか嫌な雰囲気だったね……雑菜、あの人たち嫌い」

食事から戻ると、透と雑菜も私たちの部屋に集

まって、プロデューサーが戻ってくるのを待っていた。窓の外はようやく暗くなり始めたばかりだが、日本時間で言えばもう深夜になっているはずだ。お腹が満たされたとたん襲ってきた眠気に、瞼が重くなるのを感じる。小糸と雑菜はベッドの上で思い思いにくつろいでいる。透は椅子に座って、窓の外の夕焼けというには不吉なまでに赤い空を眺めていた。

「浅倉」

「ん」

「……今のうちにおばさんに連絡しといたら。空港着いてから連絡してないでしょ」

「あ……忘れてた。しとくか。連絡……通じるかな？」

「通じるでしょ。ネットはきてるんだし、チェーンで」

そういう私も、さっき通知を確認して初めて、家から連絡がきていたことに気付いたのだった。自分で思っているよりも疲れているのかもしれない。でも日本はいま何時なのだろう。確か時差は……

「……みんな？」



日本との時差を思い出す前に、ドアをノックする音がした。

「入っても大丈夫か？」

プロデューサーの声だ。目くばせすると、疲れが出たのかベッドの上でふにゃんと座っていた小糸が慌てて膝を揃えて座り直す。

「……どうぞ」

「すまないな。疲れているのに」

「いえ」

「一番疲れた顔してるじゃん。プロデューサー」

「はは……そんなに顔に出てるか？」

透の声に、プロデューサーは力ない笑みを浮かべる。

「で？ 何か話があるんじゃないですか？」

「撮影は中止だ」

「え」

「……順を追って話していただけると」

眠気は吹き飛んだが、頭が回っていない感じがする。

「さっきの銃を持った人たち、なんだったんです

か？ この国の軍隊？」

「PMCだ」

「ピーえむしー？」

雑菜が気のない風に繰り返す。

「プライベート・ミリタリー・コントラクター……軍隊ではないんだが、同じように銃を持って警備や護衛なんかを請け負う会社だ」

ニュースで聞いたような記憶がある。軍隊の代わりに銃を持って戦う人たち。

「そんな人たちが必要なんですか？」

「そうじゃないはずだった」

「プロデューサー」

その口調に苦々しいものを感じ取ったのか、透が座っていた椅子を立った。

「座んなよ。とりあえず」

「ああ……すまん。そうさせてもらうよ」

この人にしては珍しく、というべきだろうか。プロデューサーは勧められるがまま、透が座っていた椅子に腰を下ろすと、顔の前で指を組んだ。

「コーディネイターから、明日以降の撮影にPMC

の護衛をつけると言われた」

「そ、そんな危ないところ……行くんですか……？」

「勿論行かせられない。だから断った」

「びえ……」

小糸が胸をなでおろす。

「じゃあ、このまま日本に帰るってことですか」

「そうだ」

ふう、とプロデューサーは息を吐く。

「半年前の事故以来、街の大部分が立ち入り禁止になって軍隊が封鎖しているらしい。一部では閉じ込められた市民が暴徒化して、略奪に走っているということだ……すまない、円香」

指の隙間から、プロデューサーは私の方に視線を送る。明らかに憔悴と疲労の色がにじんでいた。

「は？」

「危険はないのか、と言われたときにもっと真剣に考えるべきだった。俺のリサーチ不足だ」

「……今更ですよね」

「そうだな……」

はは、と力ない、自嘲にも似た笑みが彼の口から

洩れる。

「危ない場所には近づくかない、護衛は念のためだ、そう言っていたが、もう信用できる段階じゃない。

はづきさんに明日のなるべく早い便で日本に帰るチケットを手配してもらった」

「撮影、どうするの」

「中止するしかない」

「……大丈夫なんですか」

「みんなの安全には代えられない」

「あーあー」

重苦しい沈黙が部屋の中を押し包みかけた時、雛菜がばたんとベッドの上に手足を大の字に伸ばした。「せっかく飛行機で海外来て、雛菜たちケーキ食べて帰るだけかー」

「け、ケーキ食べてたの雛菜ちゃんだけでしょ…

…！」

「えー、小糸ちゃんも半分たべたでしょー」

「ふっ」

緊張感のかけらもない、雛菜と小糸の掛け合いを眺めていた透が、笑みを漏らす。

「やっぱり、変わらないね。いつもと」

「……そうかもね」

「帰るか。日本」

「それしかないんじゃない」

私はうなずき、横目にプロデューサーを見る。

「……ありがとう、みんな」

ふっとプロデューサーが相好を崩した。肩の荷が降りた、そんな感じだった。

「今日はゆっくり休んでくれ。明日は早い」

「……結局、一晩ただけだったね」

「そうね」

翌朝。ノルヴィンスクを発つ最初の便。透と並んで、私は窓から遠くなっていく地面を見下ろしていた。怖いとは思わないが、ふわっと体の中が浮くような感覚が、どうにも気持ち悪い。

上昇が終わると期待は水平飛行に移り、機体を傾けて旋回を始めた。窓の向こうに、昨日ホテルから眺めたタルコフの街並みが映る。結局訪れることの

なかった街。柄にもなく、妙に感傷的な気分になっている気がした。

「でもケーキ美味しかったよ……?」

「……朝もまたケーキばかり食べてたでしょ」

後ろの席から響く雑菜の能天気な声に、私は深く息を吐く。耳が痛いのは気圧のせいだろうか。

「……プロデューサーさんも一緒だったらよかったのにね……」

「仕方ないでしょ。残ってやることもあるって」

機内にほかの乗客はいなかった。私たちだけだ。

プロデューサーの姿もない。朝、私たちを空港まで見送ると、後処理があると言って一人現地に残った。

「だからって騒がないで」

「はい……」

「……ねえ、樋口」

外の様子をじっと眺めていた透が、ぼつりとつぶやいた。

「何?」

「あれ、何だろ」

「……?」

穏やかな夏の空。ところどころに千切れた雲がかかる緑色の地平線。その雲の切れ間、透の視線の先に、何かオレンジ色の小さな光が見えた。

「あー……」

その小さな光は、白い煙の尾を引きながら大きくなってくる。いや。明らかに、こちらに近づいてきている。

「やばいやつかも。あれ」

煙の尾を引く、光るなにかが窓から消える。次の瞬間、閃光が走り、機体が揺れた。

「……樋口」

私は目を開ける。

「ねえ、生きてる？ 樋口」

透の声。いつもと変わらない、何も考えていなしうな声。

「……透？」

「よかった、生きてた」

灯油の燃える匂いが鼻を衝く。金属がへしゃげる

耳障りな音。警報。目の前にぶら下がったままの酸素マスク。緊急脱出のパンフレット。客室乗務員とパイロットの怒鳴り声。一気にフラッシュバックした記憶がわっと洪水のように押し寄せた後で、ようやく何が起きたかが呑み込めた。

「怪我、してない？ 樋口」

「……大丈夫」

衝撃で圧迫されたのか、シートベルトをしていた骨盤のあたりが鈍く痛んだ。折れたりはいしてないようだ。

「……墜落……？」

「みただね」

透がシートベルトを外してくれる。現実感がまるでない。

「小糸と雛菜は」

「大丈夫。外にいる歩ける？」

「……うん」

透に手を引かれるまま、私は痛む頭を振り払って立ち上がる。

「ここは危ない。行こう」

開けっ放しの後部ドアから外に出ると、私は眩しさに目を細めた。

「透ちゃん……!! 円香ちゃん!」

「……小糸……」

墜落した機から少し離れて、木の陰に身を潜めていた小糸が私たちを見つけて立ち上がる。傍らに雛菜の姿もあった。

「円香先輩、大丈夫?」

「うん……大丈夫。歩ける」

透に引かれていた手を放して、背後でくすぶる飛行機に目を向ける。機体はひどいありさまだった。緑色の地面には墜落した機がえぐった痕が赤茶色の尾を引き、途中で木にぶつかったのか、翼の半分が中ほどで折れていた。胴体はほぼ原形を保っていたが、コクピットの窓には点々と穴が穿たれている。

「他の人たちは?」

「分からない」

透が静かに首を振る。その背後で、パツと機体から炎が上がるのが見えた

「樋口が最後だと思う」

「……そう」

私は反論せず、頷いた。

「荷物、置いてきちゃったね……」

「き、貴重品は持ってたから……大丈夫!」

スマートフォン、パスポート、財布。私も幸運なことに、貴重品はすべてポケットに入れていた。

「スマホもつながらないしく、どうしよう?」

「とりあえず……行こっか」

どこへ、と聞くまでもなく、透は歩き出す。

「あゝ、待って?」

「どうしたの?」

林の中をしばらく歩いたところで、最後尾を歩いていた雛菜が足を止めた。

「隠れた方がいいかも」

「ぴえ……?」

「樋口」

先頭を歩いていた透が目くばせする。  
「こっち」

促されるままに、私たちは低い木の茂みの傍らに身を潜めた。

「……なんなの」

「静かに」

踏まれた小枝が折れる音。人の声。少しずつ近づいてくる。

「……O r a y n」

息を殺す。その銃を持った男は、私たちに気付いたのではなかった。一瞬足を止めただけで、立ち上る煙の方に走りだしていく。

「……び……」

「行ったの？」

「うん」

男が遠ざかっていくと、私たちはそろそろと茂みの下から這いだした。

「い……今の人って……」

ライフル銃を持っていたが、服は普通のセーターに、釣り用のベストのようなものを着ていた。軍隊でもPMCでもない。プロデューサーが言っていた。タルコフしないでは地元住民が暴徒化して略奪に

走っている、と。

つまり、今は私たちはタルコフにいる。

## Trust gain

「何やってるの、浅倉」

「あー……ごめん」

透の手から拳銃を取り上げる。

「本物かな、って思ってた」

「はあ……」

透から取り上げた、まだ熱の残る銃をパーカーのポケットにねじ込むと、私はその持ち主に視線を移した。

墜落現場から歩き続けて、時刻は昼近くになっていた。まるでこの街は、どこに行っても銃撃戦をやっているようだった。普通の市民の姿も、警察の現れる様子もない。銃声と、見知らぬ言葉で交わされる怒号を避けて、私たちはこの小高い丘の上にある、ホテルのような建物に身を隠していた。相変わらず携帯は圏外のまま。これからどうしようかと考えあぐねていた時、建物の中でも銃撃戦が始まり……銃声が収まった頃、一人の男がドアに倒れ掛かるようにして、部屋の中に入ってきた。

「ま、円香ちゃん……！ それより、この人……！」  
床で倒れている男の傍らに屈みこんでいた小糸が、  
すがるようにこちらを見る。

「怪我してる……！ 手当てしてあげないと……」

上下揃いの、細かい模様が入った迷彩服姿の男。  
PMCなのか軍人なのか、私には区別はつかなかった。最後の力でドアを押し開けると、そのまま床に倒れ伏していた。脚のあたりからぱたぱたと血が染み出し、カーペットの上に血溜まりを作っている。

「え、えっと……止血……！ 傷、押さえないと……」

「樋口、そっち持って」

「ん」

透の合図で、男の体を起こす。ズボンの左脚が  
じつとりと血で濡れていた。

「止血ってどうやるんだっけ」

「なんでもいいから……押さえるんだよ……！」

意識のない人間。それも私たちより体格のいい外

国人の男。私と透で重い体を引きずるようにして、壁に寄りかからせて座らせると、小糸が脚の傷にハンカチを当てた。

「小糸ちゃん、すごいね」

小糸の手の上から傷口を押さえながら、透が言う。

「……浅倉も去年、講習受けたでしょ」

「そうだっけ」

まずは血の出ているところを抑える。一年生の夏休み前に消防署の人が来て受けた救急救命講習でそう聞いた記憶がある。

「でもすごいよ。とっさにできるの」

「……そうだね」

三人がかりで押さえても、白いハンカチは見る見る間に、噴き出した血で赤く染まっていく。救急車が来るまで待つだけなら、それでもいいのだろう。建物の外に停まっている、放置され荒らされた救急車が脳裏に浮かぶ。この街に病院などあるのだろうか。

「どうしよう……血、止まらない……!」

「あ……これ、救急キット?」

男のつけていた装備を眺めていた雛菜が、暢気に

呟く。

「……使えるの」

「つかえるかも?」

迷彩柄に黒い十字模様が表示されたパックを開けると、雛菜はビニールで包装された黒いベルトのようなものを取り出した。

「雛菜ちゃん……! それ、貸して……!」

「は……い」

「円香ちゃん、ここ、押さえて……!」

小糸に代わって、傷にあてたハンカチを強く押さえる。ハンカチの下から断続的に血が溢れて、ぼたぼたと手を伝う。

「私たちの時にやったっけ、あれ」

「さあ」

戸惑いがちな手つきで、小糸は脚に黒いベルトを巻き、ぐるぐるとプラスチックの棒のようなものを廻して固定していく。私も見た記憶がない。今年から講習のカリキュラムが変わったのだろうか。

「これで……大丈夫、だと思っ……」

止血ベルトを固定し終わると、小糸はへなへたと



床の上に腰を下ろした。ハンカチの下から染み出す血の勢いは止まっていた。

「お疲れ、小糸ちゃん」

「びえ……」

「あと、やるよ」

キットの中に残っていたガーゼと包帯を受け取ると、透と私で傷の上に包帯を巻いた。不格好に服の上から巻いただけだったが、出血はガーゼににじむ程度に収まっていた。

「……あ。気付いた？」

無言のままだった男が、うつすらと目を開けた。顔が蠟細工のように青ざめている。

「……Japanese？」

「ああ、うん。いえー」

「……ドモ、アリガト」

苦しうにそれだけ言うと、その人はまた目を閉じた。静かだが、はっきりと息をしているのが聞こえた。

「日本語、わかるんだ」

「……そうみたい」

乾きかけた血がぺたぺたと手に張り付いて気持ち悪かった。手を洗いたい。水が出ればいいのだが。

「誰か来る？」

部屋の外、廊下のほうから足音がした。

「Xpore's cxxns? xntase cxxns?」

「にえつとー！ いえぼーんつー！」

「ちよつと」

私は隣で青い上着の男と話している雛菜の肩を小突いた。

「意味、わかるの」

「なんとなくー！」

青い上着の男が頷き、どこかへと離れていく。

「病院、あるんだね」

私たちは廊下のベンチに座って行きかう人々を眺めていた。手は洗えたが、服には血がこびりついたままだった。けれど、誰もいぶかる様子も気に留める様子もない。私たちが負傷した男と一緒に連れてこられたのは、市街地にある病院だった。丘の上に

あったあの建物と造りは似ていたが、ここではちゃんと人々が活動している。銃声もしない。ただ皆一様に疲れ、憔悴したような顔をしている。

「あ……！」

小糸が手当てしたあの兵士が、ストレッチャーでガタガタとタイルのはがれた床を運ばれていく。

「無事、だったんだね」

「そうみたい」

小糸がわずかに顔をほころばせる。気持ちは少しわかるような気がした。言葉も通じない、誰も私たちを知らない街。人が撃たれては運び込まれる、荒れた病院。ニュースの中で見る、遠い世界だと思われる。光景の中にいることに、現実感を失いそうになる。それでも、何か良いことをした、という感覚。けれど私たちの状況は何も改善していない。それもまた事実だ。何とかして、プロデューサーに連絡をつけなければならない。

「なんとななるでしょ」

「……どうやって？」

「あー……なんとか。多分」

透はいつもと変わらない。それだけで、不思議と落ち着くような気がした。

「…Excuse me」

誰かが呼ぶ声に、物思いから引きずり出される。

目の前に、白衣を着て聴診器を首にかけた女の人が立っていた。五十代くらいだろうか。

「……英語？」

「Follow me, young ladies」

五十代くらいだろうか。その人は、私たちを手招きしてついてくるよう促した。

「Take seats, please」

その人について入ったのは、休憩室のような部屋だった。真ん中に大きなテーブルがあり、地図、食品の空き箱、カップ……様々なものが広げられている。座って、と言われたのは分かった。

「Can you speak English?」

「えー……あー、うん。イエー」

透が何も考えていない自信満々な顔で適当に頷き

返す。心の中で呆れかえるが、私も会話には自信がない。

「Just call me...Therapist」

セラピスト、と聞こえた。本名ではないのだろう。役職なのか、仮名なのか。あるいは本名が外国人には発音しづらいので気遣ってくれたのか。

「あー。えっと、あいむ、とーる。まどか、こいと、ひなな」

「Okay」

透が順繰りに私たちを紹介すると、セラピストは頷き、続けた。

「From Japan?」

「いえーす」

「What's your occupation? What's the purpose?」

「おきゅ……って何だっけ、小糸ちゃん」

「びえ……っ。あ、あの……職業とか、なんでここに来たとか……聞かれてるんだと、思う……」

「えっと、ういーあー、アイドル」

「Idle?」

「We are high school student. Sightseeing for

summer vacation」

透に任せておくと話がややこしくなりそうだったので、私が横から口を挟んだ。プロデューサーから「面倒なときはこう言え」と教えられたとおりのことを言っただけだが。

「I see」

セラピストさんは少しいぶかしそうな顔をしていたが、そのまま続けた。

「How did you come to Tarkov?」

「えっと……」

「どうやって来たのか、って……」

小糸がうつむいたままささやく。

「あー。えあぶれいん、くらっしゅ。ドカーン、バリバリ」

「Where?」

「えーと……どこだっけ。事故ったの」

「ここだと思っ……」

雑菜が、テーブルの上に広げられていた地図の一点を指さす。

「合ってるの?」

「多分？ おっきな湖があつて、工場の近くを通り抜けてきて、で、このリゾートって書いてある方まで来たからそうじゃないかな？」

「You're lucky」

ラッキー？ テラピストは確かにそういった。彼女の指が、地図に赤ペンで書きこまれたドクロの上を指す。

「Minefield and snipers……if you were heading north, you were dead」

その最後の単語が、私の背筋を震わせる。デッド。死んでいたかもしれない、ということ。重苦しい沈黙が過ぎる。

「あ、あの……これ……」

沈黙を破ったのは小糸だった。

「プロデューサーさんに渡された……」

「ああ、そうだった。忘れてた」

「？」

テラピストがいぶかる視線を向けるなか、透は名刺サイズの携帯通訳機に喋りかける。確かオフラインでも使えるはずだ。

「私たちは日本に帰りたいです」

〈We want to go back to Japan〉

ボタンを押すと、単調な機械音声で翻訳文が再生された。

「……はい、どうぞ」

透が通訳機を向けると、テラピストは一語一語区切るようにして声を吹き込んだ。

〈このような機械は便利ですが、あなたたちは高価な機械には注意する必要があります。SCAVに奪われる恐れがあります〉

「すかぶ？」

その単語が翻訳できなかったことに気付いて、テラピストが続ける。

〈スカベンジャーは武装した犯罪者です。物資を盗んだり、民間の軍事契約者と殺し合いをします〉

ミリタリーコントラクター。その単語には聞き覚えがあった。プロデューサーが言っていたPMCのことだ。

〈街を出る方法はありませんか〉

〈Tarkov は地雷原とスナイパーによって封鎖されて

います。携帯電話も通じません」

「なぜ封鎖されているのですか」

「Terra Groupと軍隊は、Tarkovで起きていることを知っている人間が外部に出ることを希望しません。無理に出ようとすれば死にます」

「Tarkovで起きていることとは何ですか」

「知るべきではありません」

再び重苦しい沈黙が過ぎる。やがて、テラピストの方から沈黙を破った。

「提案があります」

「提案とは何ですか」

「明日の朝、街を出て避難する車列があります。風さを避ける準備をしています」

「一緒に乗せてもらえますか？」

街を出る手段がある。色めく私たちに、テラピストは静かに首を振り、続けた。

「残念ながら、私たちはあなたたちに無料のランチを提供できない。対価がいります」

「私たちはお金を持っています」

「仕事を依頼したい」

「……仕事？」

テーブルの上に何枚かの地図が広げられる。それぞれがこの街の様々な場所を示しているらしい。

「物資が必要です。食糧、薬、そして何より車両部品……点火プラグとバッテリー。ここにリストがあります。集めてもらえれば追加の車を用意し、あなたたちを街の外に連れていくことができます」

「……バッテリーってこれかな」

「いいんじゃない。型番とか特に指定なかったし」

棚から下ろした自動車用のバッテリーは、見た目の大きさからは想像もつかないほどずしりと重かった。確か鉛が何かを使っていたのだったか。

「今更だけどさ」

「……なに」

テラピストからは、登山用の大きなバックパックを預かっていた。ファスナーを開け、バッテリーを底にしまい込む。透は視線を上げると、暗い店の中をぐるりと見回した。

「勝手に貰っていいのかな」

「分らない」

巨大なショッピングモールに併設された……日本  
で言えばホームセンターのような、金物や住宅資材  
が置いてあるような店。看板の店名はＯＬーと、私  
たちにもわかるアルファベットで書かれていた。こ  
の店だけでも、日本にあるホームセンター等よりは  
ずっと広い。貰った見取り図によれば、高速道路に  
ほど近いこのモールにはあと大きなスーパーマー  
ケットと北欧家具の店、それに各種の専門店がある。  
普通にショッピングで回れば一日がかりでも回り切  
れないかもしれない。

今は明かりが落ち、客も店員の姿もない。通路に  
は割れたガラスやガレキが散乱し、棚にぼつりぼつ  
りと略奪を逃れた商品が残されている。ところどころ  
の通路は意図的に鉄板や土嚢が積まれ、そこかし  
こに銃弾の痕が残っている。封鎖が始まった初期に  
はもつとたくさんの商品が残っていて、それを略奪  
するもの、阻止しようとするもの、そうした人たち  
の間で争いがあったのだろう。そう。私たちがして

いることも紛れもない略奪だ。

「……仕方ない、でしょ」

「ね、点火プラグってこれ？」

隣の棚を探していた雑菜が、プリスターパックに  
収められた点火プラグを一山抱えてきた。

「えっとね、これは確か……品番の指定があったと  
思う。どれだっけ」

「……これでしょ」

ようやく闇に慣れてきた目を凝らして、リストの  
品番とプラグの表示を見比べる。

「全部持ってっちゃえばいいのに」

「え、駄目だよ」

私が選別したプラグをバックバックの中に無造作  
に放り込みながら、透が首を振る。

「要るだけにしないと、他の人が困っちゃうじゃん」

「透先輩、さっすが」

「少しは静かにして」

雑菜の能天気な声が、がらりとした店内に響き渡  
るような気がした。私の考えすぎなのかもしれない。  
今のところ、人の気配はない。しかし、このタルコ

フの街にはまだ物資が残されている、このモールのような場所がいくつかあって……そういう場所にはSCAVやPMCが寄り付きがちだと警告されていた。

「そんな場所に私たちを？」

「よそ者、女、学生、非武装。そういう条件なら狙われにくい」

それがテラピストの回答だった。もし誰かと出会ったら、荷物を捨てて逃げろという助言を添えてその非武装という最後の条件が、喉に残った骨のようにならぬように私の中に引っぱり続けている。

「……重い」

ストラップが肩に食い込むのを感じながら、バックパックを背負いあげる。パークアの肩が引つ張られた拍子に、ポケットの中に入れたままの拳銃が冷たく脇腹に触れた。透がああPMCにから取り上げた銃。使いかたも知らないくせに、私はまだそれを持っている。捨てるタイミングがなかった。そう自分に言い訳しながら。

「……次は？」

無人のレジを通り抜けて、広い通路に出る。この辺りはとぎれとぎれであるが、照明で照らされていた。

「こつちで合ってるの？」

「うん。次はスーパー。食品、缶詰とか」

貰った見取り図と通路を見比べながら、透が近所に買い物でも行くような気軽さで頷く。割れたガラス、散乱するガレキ、空の棚、通路の端に積み上げられた土嚢や金網のバリケード……そうしたものがなければ、確かに日本のモールにある専門店街とさほど変わらない。

「ね、透先輩、円香先輩？」

「何」

同じく緊張感の欠片もない声で、雛菜が後ろから声をかけてくる。

「この辺でお洋服見ていってもいい？」

「何考えてるの？」

「だって雛菜たち着替え持ってないし、服も汚れてるし？」

認めたくはないが、一理はあった。今の私たちを鏡で見ればひどいありさまだ。飛行機から逃げてきた着の身着のまま、服には泥と言わず血と言わず汚れたらけだ。日本でこんななりをしていたら通報される。そもそもが森の中を逃げ回ったり、人気のないモールで廃品漁りをするのにはお世辞にも向いていない格好だった。

「そんな余裕、あるの？」

「えっと、じゃあこうしようよ」

照明のない店の片隅でバックパックをおろすと、透は再度床にモールの見取り図を広げた。

「ここから一番近いのは正面のエントランス。帰る時はここから帰る」

「……で？」

「雑菜に服を探してもらって、私と樋口でスーパーに行く」

「……浅倉」

透の考えていることが分かった気がした。

「バッテリー持ち歩くの、面倒になったんでしょ」

「あー……そうかも。そういえば」

透、雑菜、そして私。今はそれぞれが一つずつバッテリーをバックパックに入れて運んでいる。ここからまたスーパーまで行って、戻ってくる間重たいバッテリーを運ぶのは確かに不便だ。

「じゃあ、雑菜のバックパックにバッテリーを移して、預けておく」

「えーっ！」

「……その辺に置いておいて、服を探してればいいでしょ。帰る時にまた持っていくだけ」

「私と樋口のぶんも選んでおいてよ。小糸ちゃんのぶんも」

「はーい！」

「……動きやすいのにして」

ぱあっと目を輝かせる雑菜を暗い店の中に残して、私と透は軽くなったバックパックを肩にかけた。

「……あー。広いねー」

食品マーケットもまた、日本では見たことがないほど広かった。レジカウンターの並びだけでもいく



つあるだろう。端から端までが視界に収まり程だ。

「……なんか焦げ臭くない?」

「あー。燃えてる?」

「ちょっと」

学校のグラウンドほどもあるだろうか。広大な売り場のほぼ中央のあたり。明かりが消えて暗い店の中で、そこだけがあかあかと照らし出されていた。虫のようにふらふらと火の燃える方に吸いよせられる透を、慌てて追う。

「……誰がこんなこと、したんだろ」

「分かるわけないでしょ」

フロアの中央、山と積まれた廃材がごうごうと音を立てて燃えている。あたりにフォークリフトや建設重機が放置されているところを見ると、誰かがわざわざ可燃物を集めてきて火をつけたらしい。

「火事にならないのかな」

「……さあ」

天井に燃え広がらないのかと見上げてみると、建物の屋根は火の上だけ崩れて立ち上る煙の向こうから星空が見えていた。だれが何のために、わざわざ

スーパーの売り場で火をたいたのか。闇を恐れたのか、それとも暖を取るためか。そういえば外の気温は夏ではあっても半袖では寒いほどに冷え込んでいた。あるいはただ単に、勢いで火をつけたのかもしれない。推測するよしもない。

「……行こう」

「あー……うん」

炎に照り返される、透の無防備な横顔を見ていると、どうしようもなく不安に駆られた。いてもたってもいられずに、手を引いて売り場の暗い方へと促す。明るいとこにいるべきではない。そんな気がした。このモールにいるのはおそらく私たちだけではない。なるべく静かに、目立たないようにしなければならぬ。考えすぎだろうか?

「……あー、あんまりないね。もう」

私の焦りを知る由もなく、透は通路をぐるぐると回りながらんとした棚を確認していく。

「食べ物とかもさ」

「うん」

「私たちで確保しなきゃいけないのかな。こうやつ

て、いろんなところを探して」

「だと思う」

「ふーん。じゃ、いいね。入れてくか、どんどん」

テラピストから依頼されたのは、コンパクトで保存の効く缶詰だった。それだけではない。私たちが今夜食べるものも集めてこなければならぬ。出発前に水とクラッカーを分けてもらったが、それ以外にはなにも口にしていない。依頼がうまくいって明日街を出られればいいが、そうでなければ……考えたくないが、まだ何日かこの街で過ごすことも考えなければならぬ。

「プロデューサー、心配してるかな」

「してるでしょ、あの人なら」

棚を漁りながら、透がつぶやく。同じことを考えていた、らしい。

「今頃あちこち走り回ってるんじゃない」

「あー。だよ。お母さんにも心配しないでって言っておいてくれるかな」

「私たちが直接言わないと、意味ないでしょ」

「……そうかな。あ、あった。これ。牛」

「牛？」

透が渡してきた缶のラベルを見て得心する。テラピストが言っていた牛肉の缶詰だ。

「牛、まだあった。持ってこ、じゃんじゃん」

受け取ったそばから、缶詰を透が背負っているバックパックに入れていく。

「運べるの？ バッテリーも持ってかなきゃいけないでしょ」

「あー……そっか。じゃあ、缶詰、このくらいで。ふふっ、重い」

「……あとは私の方に入れて」

透と位置を交代し、今度は透が私のバックに受け取った食糧を入れていく。

「ジューズ、コーラかな、これ。チョコレート？ 遠足みたいじゃん、樋口」

「たまたまその辺にあっただけ。……何」

くすくすと笑いながら、透がバックにしまいかけた板チョコレートの包みを横合いから差し出す。

「これさ、小糸ちゃんみたいじゃない？」

「は？ 似てないでしょ」

パッケージに描かれた、丸々とした女の子のイラスト。小糸とは似ても似つかない……いや、そう言われれば、びっくりして目を見開いたまま固まっている時はこんな顔をしている……気もしてきた。

「いいじゃん。お土産ってことで」

「……そうだね」

小糸はテラピストの病院に残してきた。あのPMCの止血をしたのが小糸だと知って、救急の手伝いをしてほしいと言われた。けれど、結局体のいい人質ということなのかもしれない。私たちもあの人を信用し切れていないように、向こうもこちらを信用していない。そういうことだ。

「……行こ」

「あ、待って」

雑菜の待つメインエントランスに向かう途中。通路に食品のワゴンのようなものが並んだ一角で、透が足を止めた。

「ここ、薬あるかも」

「……薬？ あ、待って」

止める間もなく、透はわずかと仮設ベッドが並んだ一角に入っていく。他の店舗とは明らかに雰囲気が違う。病院で見ようとなついていたがベッドの横に並んでいて、微かに消毒薬の匂いがした。

「救護所、みたいな感じかな」

「……かもね」

救急箱だろうか。透はオレンジ色の、工具箱くらいの箱を開けて中身を検めていた。私はうなずき返しながら、あたりを見回す。ここが仮設の救護所なら、このモール自体が避難所として使われているのかもしれない。そうすると、通路に並んでいるワゴンは食品を売っていたのではなく、炊き出しか何かの機材だったのだろうか。

「あ。これ、なんか使えそう」

「……ちょっと」

「セラピストさん、だっけ？ とりあえずもってけばわかるんじゃない、あの人なら」

まあ、軽いから持つて行くには不便はない。私がファスナーを開けようとパックを降ろした瞬間、透

は手を止め、視線を上げた。

「……？」

「誰か、来る」

「……っ！」

「こっち」

透が私の手を引く。ここは通路からひとがいるのが丸わかりだ。透に手を轢かれるまま、私たちは救護所の奥、仮設ベッドの影に身を潜めた。ベッドのシートには点々と血が染みついたまま乾いている。既に匂いなどするはずもないのに、血と錆びの匂いがあるような気がした。

「……」

透と二人、息をひそめたままじっと耳を澄ます。足音がゆっくりと近づいてくる。ロシア語だろうか、聞き取れない話し声。笑っているのは分かった。そのまま遠ざかってくれれば……そんな私の希望的観測はむなしく、ついたてに大柄な人影が映った。

「…Deborah (女の子)？」

黒っぽい人影が明かりを遮り、私たちの上に影を落とした。顔全体を覆う黒いヘルメットに、防弾

チョッキ。服は日本でもよく見るブランドのトラックスーツで、なぜか同じ白い三本線がヘルメットにも入っていた。

「えーと……きら？」

そのヘルメットの男は私たちに向けていた機関銃を降ろすと、防弾チョッキの胸に書かれていた文字を親指で指した。白い文字で「KILL」&書かれていた。

「B KILL！」

ヘルメットの隙間からくぐもった笑い声が漏れた。それがこの人の名前らしい。ロシア語ではないので、ニックネームなのかもしれない。

「やー、とおる。でいすいず、まどか。おーけー？」

透が英語ともロシア語ともつかないちゃんぽん言葉で返すと、再びヘルメットがさがさと揺れた。笑っているのだろう。

「Top, Madoka……」

キラがそっくり終わらないうちに、ヘルメットから火花が散り、遅れて銃声と怒号が響いた。

「…Fuckin' Rusky!」

「Get the cocksucker!」

壊れた人形のように崩れていくキラが、ヘルメットのフェイスカバーの隙間から私たちを見た、ような気がした。

「透!」

「うん」

銃声と怒号は私たちがさっきまでいた、マーケットの方から聞こえた。割れたガラスが飛び散る中、私はバックパックを引っ掴んで反対方向に走り出す。

「透先輩? あ、円香先輩も」

エントランスの横で、雛菜が待っていた。その能天気な顔が、今は無性に気に障った。

「逃げるよ、雛菜」

「あ、はい」

背後ではまだはじけるような銃声が響いていた。

「待って〜! これ重い〜!」

「手伝うよ。先に行つて、円香」

「……行けるわけない」

バッテリーは置いていけ、というべきだったのかもしれない。私が逡巡する間に、透は雛菜と分け合

うようにして重たいバックパックを担ぎ上げていた。

「大丈夫。行こう、走って」

有刺鉄線の間をかき分け、割れたガラスを踏み越えて停まったままのエスカレーターを駆け降りる。全力で走っているつもりなのに、まるでシロップの中を泳いでいるように自分の足取りが遅く感じられる。モールのエントランスを離れ、ガードレールを超えて窪地になった茂みの影に転がり込むと、私は天を仰いだ。肺が痛い。脚もだ。

目の前で、人が死んだ。誰かに撃たれた。その事実が頭の中にしみ込んでくると、ようやく自分の手が震えていることに気付いた。モールの外はとうに日が暮れていて星が出ていたが、陽が沈み切らないのか、空全体が夕焼けのように染まっていた。血のように赤かった。

〈話が違う〉

〈残念です〉

寸断されたバイパス道路を歩いて渡り、テラピス

トのチームの車で病院まで戻ってきた後。バッテリーと点火プラグ、缶詰と医薬品を引き渡した後で、私たちは街を出ることはできないと告げられた。

〈小糸に会わせて欲しい〉

〈それはできない。彼女は隔離されています〉

私たちがモールで資材を集めていた間。病院に残っていた小糸が熱を出した。感染症の疑いがある以上、街を出る車列に乗せるわけにはいかない。それがテラピストの説明だった。

「え、せっかく重い運んだのに」

雑菜が後ろで文句をたれる。相変わらず緊張感がない。

「貸して」

「はい」

透から通訳機を受け取り、会話を引き継ぐ。

〈街から出られないなら、引き渡したものを返してほしい〉

〈それは可能ですが、あなたたちが持っていても意味はないと思います〉

〈私たちを騙したのではないですか〉

〈それは違う。そのような意図はありません。あなたたちの仕事には対価を払います〉

〈対価は必要ありません。友人に会わせてください〉

答えずに、テラピストは指で目元を揉んだ。突然、机の上の電話が光った。内線電話は生きているのだろう。受話器を取って何事か話すと、テラピストはスピーカーフォンに切り替えた。

「ま、円香ちゃん……？」

「小糸？」

電話から聞こえる小糸の声。見えないのをわかっていて、私は無意識のうちに頷いていた。

「……みんなも？」

「うん、いるよ」

「やは」

透、雑菜の順に目くばせを交わすと、私は電話機の方に身を乗り出した。

「……熱があるって言ってたけど、大丈夫なの」

「た、大したことないよ……！ 疲れが出ちゃったの、かな……？ みんなは、大丈夫？」

辛そう、というよりは申し訳なさそうな声だった。  
「こっちは大丈夫。みんな元気」

モールから戻って小糸の状態を告げられたあと、  
私たちもテラピストの診察を受けていた。健康も健康。熱も平熱そのものだ。

「よかった……」

電話越しに声を聞くだけで、肩から力が抜けていくのを感じた。

「ごめんね……」

「何が？」

「その、私のせいで……」

「ううん」

「小糸ちゃんのせいじゃないよ、全然」

ずる、と鼻をすする音がスピーカーから部屋中に響く。

「……私は、大丈夫だから……あの……」

「街から出る方法は何とかする。小糸はまずゆっくり休んで」

「うん……ありがとう……！ あ、お休みなさい……！」

お休み、と声をかわし、テラピストに目くばせする。テラピストはうなずき、受話器に切り替えて何かロシア語で話すと、電話を切った。

〈念のため、一晩彼女の様子を見させてほしい。充分なケアはします〉

一呼吸おいて、私は通訳機に声を吹き込む。なるべく伝わりやすいように、言葉を区切りながら。

〈あなたを信頼しているのか、迷っています〉

〈理解できます〉

テラピストも何ごとか、逡巡しているようだった。

〈医師として私は誓いを立てています。それはあなたの国でもこの国でも同じです。彼女の安全は保障します。それに……〉

私たちはその言葉の続きを待つ。

〈あなたたちはサマリアから来た人かもしれませんが〉

「サマリア？」

その地名には聞き覚えがなかった。

「えっと……日本から来たんだよね、私たち」

「なんで自信なさそうなの」

がやがやと言葉を交わす私たちを見るテラピストの目が、心なしか和らいでいたような気がした。

「わかった」

透が私の目を見た。

「任せようよ。お医者さんに」

「じゃあこれゝ、着替えゝ」

雛菜がテーブルの上に紙袋を置く。モールで探してきた、小糸の分の着替えだ。私はふう、と息を吐き、通訳機を手にする。

〈彼女のことをよろしくお願いします〉

〈あなたたちも休んだ方がいい。寝る場所は用意しています〉

「……そうだね」

「雛菜もうくたくたゝ」

疲れているのは確かだ。飛行機が墜落し、地雷原で封鎖された街を通り抜け、人が死ぬのを見た。気だけが妙に昂っているが、脳の芯が鉛のように重い。眠るべきなのだろう。安心して眠れる場所があれば、だが。

「……なんかさ」

「うん」

薄汚れたマットレスに横たわり、透と私はドラム缶の中で燃える火を眺めていた。雛菜はと言えば、さっさと奥にあるソファを占領し、一足先に寝息を立てている。マットレスは機械油と煙草のヤニが染みついたような匂いをさせていたが、眠気に勝てなかった。服も脱がないまま、スプリングの軋む音を聞きながら眠気が押し寄せてくる。

「キャンプみたいで、楽しい」

「……そう？」

私たちに割り当てられた寝場所は崩れかけた地下道だった。むき出しのコンクリートが熱を吸い取っていくようで、夏でも冷え冷えとしていたが、暖を取るための焚火、寝るためのマット、ソファにテレビまであった。昨日まで誰かが住んでいたかのように。その住人が今どうしているのかは、考えないことにした。

「こうやってさ」

「うん」



脇が勝手に重くなっていく。私は自動応答のように、透の声に頷く。

「……円香と一緒に寝るの、いつぶりだろ」

「小学校？」

昔はよく、互いの家に泊まりにいつていた気がする。夏休みとか、連休とか。自分の家じゃないところで、普段なら寝ている時間になっても、布団をかぶって話していた。ちょうど今みたいに。あの頃の私たちは、何を話していただろう……。

目を覚ますと、火は消えていた。

「……透」

隣で眠っている透の肩をゆする。起きる気配はない。

「……起きて」

「んー、樋口……？」

ドアから漏れる青白い光が、真っ暗闇に慣れた目に刺すように痛んだ。コンクリートの欠片が碎ける音。足音がする。誰かがいる。醒め切らない頭で、必死に考えをめぐらす。使えるだろうか？ 使うし

か、ない。マットレスの下に腕を差し込む。夜の間に冷え切った鉄とプラスチックの塊が指先に触れた瞬間、誰かの手が私の腕を抑えた。

「ごめん」

「ッ……？」

「起こすつもりはなかった」

小声でささやくその声は、訛ってはいたが日本語だった。

透と雑菜を起こさないよう足音をひそめて、男の後についていく。シェルターを出て地上に上がると、私は目を細めた。日没があいまいだったように、夜明けもあいまいだった。塗りつぶしたような薄青い光が空を覆っている。こうして明るい中に見る街並みは、寒々として無残だった。通りにも建物にも人の気配はない。路上には割れた窓ガラスが散乱し、持ち主のいない車が玉突き事故でも起こしたかのようにな規則に放置されている。

「この辺りはまだ、マシかな」

男は階段の脇に立つ私の隣に並んで、同じほうを

見ながら煙草に火をつけた。

「おっと、悪い習慣だね。ごめん」

「……あなたは？」

そう聞いて、煙草の匂いに覚えがあることに気が付いた。

「……すみません。あなたの家、だったんですね。

勝手に……」

「Therapistから話は聞いてる。それに……」

日本語は違和感のないくらいに流暢だったが、Tの発音がネイティブっぽい……ように聞こえた。テラピストが自己紹介するときは、もっと硬く「テ」に近く聞こえた。なんとなくではあるけれども、ネイティブでない人の話す英語の方が聞き取りやすいような気がする。

「改めて、礼を言わなきゃ、って。ありがとう」

その一言で、ようやく気付いた。この人は、昨日足を撃たれて倒れていたあのPMCだ。あの時は顔面蒼白で苦しうに顔をゆがめていたので、気が付かなかった。

「もう、大丈夫なんですか」

「Elvia……ああ、Therapistのチームは優秀だよ」

横目に脚の方を見ながら尋ねる私に、男は投げ捨てた煙草を踏み消しながら答える。

「company……会社からも特別な……処置、治療？ 受けてるし」

詳しくは分からないが、あの時は確かに出血多量で生死の境をさまよっているように思えた。それがたった一日で歩けるまでに回復するものなのだろうか。

「何より……君たちが手際よく応急処置、してくれたおかげ……かな」

「……出来ることをしただけです」

「この街に残っている人たち、そんなことしないよ。対価を払うか、銃で奪い取るんだ」

「あなたも？」

「うん。Contractor、だし」

わずかに苦々しさを帯びた声だった。

「……けど、礼儀は弁えてる、つもり。このシェルターは好きに使ってくれていい」

「あなたは？」

「何とかなる」

「……ありがとうございます。助かります」

私は静かに頭を下げる。

「長居はしませんので」

「そうだね。それがいい」

男も、静かに笑った。

「日本語、お上手なんですね」

「オキナワ、何年かいたんだ」

お世辞ではない。固有名詞が詰まったり英語交じりになったりすると、助詞を省略しがちなことを除けば無理なく会話できるレベルだった。なんとなく、耳なじみのある喋り方にも聞こえる。けれど、それと信用していいかどうかは話が別だ。日本を出る前に、プロデューサーにも言い含められていた。海外で言葉が通じるからと言って信用すると危険な目に遭いかねない。

「それ、使える？」

男の視線が、そこに何かあるかを察したのか、ポケットに突っ込んだままの私の手に向く。無意識のうちに私は、ざらざらとしたプラスチックのグリッ

プを握りしめていた。

「……あなたのもの、ですよね」

私はゆっくりと、引き金に指を触れないように気をつけながら、ポケットから手を出した。

「返した方がいいですか」

「もう、きみのだよ。この街ではそうなってる」

そういいながら、男は私の手から銃を取った。手慣れた動きでグリップの中の弾倉を外し、スライドを引く。空中に飛び出した銃弾が、朝日を受けて鈍い金色に輝いた。

「chamber……これでいま、銃の中にammo、ない」

空中でキャッチした銃弾を込め直すと、マガジンをめ直す。見とれるような、熟練した動きだった。「使うときは、slide……引く。manual safety……手動の安全装置、ないから。そのままぐっと握ってtrigger、引く。それだけ」

苦勞しながら説明を終えると、男は銃口を自分に向けて銃を差し出した。断るべきだったのかもしれない。けれど私はそれを受け取り、再び上着のポケットにしまった。

「樋口ー？」

ぴくり、と私は耳をそばだたせる。眠そうに目をこすりながら地下から顔を出した透は、私と男の顔を順繰りに見比べると、気の抜けたあくびをした。

「ふああああ……樋口、だれ？ この人」

「この大家、かな」

「あー。お邪魔してます。えーと……まい、ねーむ、いず」

「浅倉」

寝ぼけていたのか、素で気付いていなかったのか。

「え？」

「日本語、通じるんだって」

「あー……そっか。そうだね」

くすくすと笑いながら、透は日本語で自己紹介を繰り返した。

「……浅倉透、です」

「樋口円香です。よろしくお願いします」

ぺこり、と頭を下げる私たちに、つられるようにして男も頭を下げる。

「Coco、と呼んで。よろしく」

「ココさん。いいね、なんか。よろしくお願いします」

そういえば私も名前は聞いていなかった。それにしても、タルコフの人たちはそんな通称やらコードネームやらで呼び合って困らないのだろうか？ 私が益体もないことを考えていると、ココと呼ばれたPMCはこちらに向き直った。

「あー……」

「……？」

「Therapistから伝言があるんだった」